
闇の鍵

M3

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の鍵

【Nコード】

N4366Y

【作者名】

M3

【あらすじ】

皆さまのアンケート集計結果、多かった『青の被魔師、未来編！』執筆開始！！20歳となった燐達の成長を、しかとその目で見てみる！

序章（前書き）

20歳をむかえた燐含むかつての被魔塾の仲間達、任務で忙しなかった彼らだったが…

…1つの鍵が、正十字学園に危機を及ぼし、この鍵が再び…彼らを引き合わせた！！

序章

人間と悪魔の血を引く少年・奥村燐の前に突然、父親である魔神サタンが現れた。

魔神サタンが自分の力を継ぐ燐を連れ去ろうとした際、燐の養父・藤本獅郎は燐を守って命を落とす。

燐は被魔師になって、仇であり父である魔神サタンを倒すため、被魔師である弟・雪男の指導の下、被魔塾で志を共とする友人達と訓練を積んできた。

—あれから10年……

かつて被魔訓練生として悪魔被い（エクソジズム）を学び始め……
エクソジイア候補生へも無事昇格して、被魔師の道を地道に上がってきた燐達は

……

序章（後書き）

皆さま！

アンケートにご協力ありがとうございました！！

青エウ、挑んでみます さあ、あたたかい目と心でご覧下さい！

10年越しの彼ら

「奥村先生！」

「?!」

―正十字学園・祓魔塾―祓魔師を志す者は、この塾に通い、祓魔訓練生ページとして悪魔祓い（エクソジズム）の学び、祓魔師としてのノウハウを仲間と共に叩き込んでいく。

生徒に呼び止められ振り向いたのは、奥村雪男……正十字学園歴代最年少で祓魔師の資格を取得した秀才だ。

「はい。なんでしょう?」

「えっと……遅れていた提出物を出したくて……」

「はい、提出締め切りは出来るだけ守って下さいね」

「は、はい!! すいません……」

「クス…… よろしい。受け取りますよ」

ヒソ……

「相変わらずかつこいいよね 奥村先生！」

「20歳だよ！？若いのに落ち着きがあってさ」

「優しい！！…よね」

「あたし奥村先生の悪魔薬学大好き！分かりやすいもん」

「……そういえば…奥村先生って双子のお兄さんいるんでしょう？」

「性格全く似てないらしいよ？」

「けど……被魔師としての腕は…確かだって」

「だって……」

“キャンサー名誉騎士”の称号持ってんでしょ？ 燐先生………」

「はあ…終わった…お昼休み、どこで食べようかな……あれ？？
お弁当……」

「いたいた！雪男！」

「？！兄さん……」

「お前弁当忘れてったろ」

雪男の前に現れたのは――奥村燐。

悪魔と人間のハーフだ。父・魔神サタンの血を濃く受け継いだ燐は、養父の藤本獅郎から預かった降魔剣を抜くことで、悪魔の力を解放する。

10年経ち、現在の奥村燐は、被魔師の称号の1つ、“名誉騎士キヤンサー”を取得し、かつて養父だった藤本獅郎の称号……“聖騎士パラディン”を目指すと共に、仇である父・魔神サタンを倒すべく……現在も被魔師として磨きをかけている。

とはいえ……10年経た今、昔のせつかちさや、“青い炎”のコントリールの不安定さも抜け、『学園一のナイト（騎士）』

と謳われるほどにまで成長を遂げた。

弟の雪男も、^燐が候補生エクスイアの頃は、講師を担当し面倒を見ていたが、^{キャンサー}名誉騎士となった兄を背に、誇らしくも…現在“上級被魔師”の称号の自分に、満足感を得られてはいなかった……

「ごめん…。なんか今朝バタバタしちゃってさ…」

「珍しいな。いつも時間に余裕のあるお前が」

「テスト作らなきゃいけないくて…。寝不足だよ」

「受け持つてる学問多いもんな。俺はほとんど実技で済ましちまってるから」

「またそうやって楽しむ…。たまにはペーパーテストっていうのも生徒には大切なんだから」

「へいへい、いつかな!」

『いつか?!』

「そういえばまた髪伸びたね…。なんかうざったそうだよ?…後ろなんて肩過ぎちゃってんじゃない。切ったら?」

「ああ…切りに行く暇なくてさ…。けど、この被魔師のスーツにやこのくらいの髪の長さの方があってね?」

「兄さんだけだよ…そんな斬バラ頭似合ってたの…」

「おいなんだと!?!…お前は変わり映えしねえなあ。奥村雪男くん。15歳の時とほとんど変わっておらんね。ん?」

「ム。……人間変わらないのが一番さ。それに、僕は背が高い。」

「ちっ！180がよく言っぜ！」

「185だよ。それは兄さんの身長だろ」

「変わんねーよ」

「悪いが？も違う」

「うるせー眼鏡！コンタクトにでもしてみろってんだ！」

「コンタクトはめんどくさいんだよ。兄さんこそ、その髪を少しでも整えたらモテるんじゃない？」

「はっ、残念だな。雪男…今の俺は、もはやお前よりモテんだよ！
！今時の女子は、お前みたいな小食男子の真面目メガネキャラより、肉食男子の悪魔キャラの俺の方がキュン」ときちまうんだな〜これが」

『悪魔キャラっていつか悪魔じゃん……』

「はあ…わかったわかった。とにかく、お弁当を食べさせてよ……
??兄さん、昼は？」

「もう食った。これからしえみの店に行くんだ」

「しえみさんの店に?…あ。じゃあついでに買い物頼んでいいかな?」

「おう。」

「じゃこれメモね。しえみさんによろしく」

被魔用品店『フツマヤ』

被魔師が使用する薬物の原料・植物その他様々取り扱っているお店だ。この店主を任されているのが杜山しえみという女性だ。燐や雪男と同じ年で、燐とは、共に被魔塾に入り学んできた同期でもある。

エクスワイア
候補生時代から悪魔薬学などの薬品植物にくわしく、現在は、手騎士ティマー・医工騎士ドクターの称号を持つ中一級被魔師である。

「しえみ、いるか？」

「?ーり、隣!いらっしやい」

「店に籠もりっぱなしか?身体に良くねーぞ」

「う、うん……でも、あと少しで屍系グールの魔障の毒に効く速効性の薬が出来そうだから……」

「そっか。相変わらずすげーな!」

「う、ううん!凄いのは隣の方だよ!名誉騎士キャンサー取得したんだから」

「俺は悪魔の力のおまけ付きだけどな」

「そんなことない。あんなに……悩んで……苦しんで……向き合ってきた」

力を、上手く使いこなせるようになったから、燐の努力の賜物でしょう?。」

「ありがとな」

「／／えへへ。え…えっと…な、なにか、お買い物?」

「?!やべ…目的忘れるとこだったわ。えっと、羊歯・牛爪・椒2つずつと…B濃度の聖水1リットルとアロエ2切れ。あ・これ袋分けてくれるか?」

「はい。少しお待ち下さい!」

「?!」

『11の気配……』

「ここにいましたかー。奥村くん」

「……やっぱりメフィストか」

ーメフィスト・フェレス。正十字学園の理事長であり、祓魔塾の塾長である。燐や雪男の養父、藤本獅郎の友人であり彼の死後は、燐や雪男の後見人の役割を果たしてくれた。魔神サタンの息子である燐を、今までうまく手を回しここまで持ち上げてくれたのもメフィストだ。しかし、彼自身の詳細は一切公に出さないため、燐は、感謝している反面……腹の中が読めないメフィストに胡散臭さも感じている。

「いやあ、探しました。」

「なんだ？」

「あとでお話しますので、理事長室までお願いします」

「任務か？」

「ええ。まあね。」

『ホント胡散臭せえ……』

「あんたから直接依頼とは……イヤな予感だな」

「ええ…ちょっと厄介です。なので、今回は少し多めの班で挑んで頂きます」
パーティー

「……………わかった。」

「パーティーのメンバーはすでに私の部屋にいます……………では」

『上一級被魔師が…多数のパーティーと任務？どんだけ厄介なんだよ……………つたく、メフィストのヤロウ』

「隣、お待たせ。はい」

「サンキューしえみ。これ、お代な！」

京より来たり

理事長室

「入るぜ」

「兄さんも呼ばれたのか」

「雪男」

「久しぶりやな〜奥村くん♪」

「?!」

「名誉騎士なんて凄いな。こっち（京）まで噂滞っとするで」

「志摩！子猫丸！」

「…………お前も呼ばれたんか」

「?!…お前まで来てたとはな…勝呂?」

「なんで疑問形やねん!!」

「いや…髪がさ…」

「あははは！ほれ坊！いうたやろ！髪おろしたら絶対奥村くん気付
けへんて！」

「気合入った鶏冠ヘア、保つといた方が…えかつたんちゃいまっ
か？」

「やかましいわ！廉造！子猫丸までなんやねん！ええ歳して、髪持
ち上げとんのもカツコ悪いやろ」

「相変わらずクソ真面目だな」

「ふんっ！袈裟には髪おろした方がええ思ったんや」

「和尚おっさまだろ！おっさま〜！」

「奥村……お前…バカにしとるやる…」

勝呂竜士。当時、熾とともに被魔塾に入学した時は、京都の仏門一派・明陀宗の若頭だったが、現在は父・達磨の意志を継ぐ、明陀宗の頭首であり、座主血統の勝呂竜士として京を守護している上一級仏教系被魔師だ。詠唱騎士アリアと竜騎士ドラグーンを取得している。

志摩廉造・三輪子猫丸。廉造は、志摩家末っ子・子猫丸は三輪家当主だ。2人ともまだ若い、幼い頃から若頭である竜士の側にいたため、現在は頭の竜士の権限により、竜士の側近であり、廉造は京都出張所 被魔師一番隊隊長を。子猫丸は、三輪家当主と、京都出張所 深部一番隊隊長の任されている。2人とも上二級被魔師であり、廉造は騎士ナイト・詠唱騎士アリアの称号を取得。子猫丸は医工騎士ドクター・詠唱騎士アリアの称号を取得した。

「しかし、ホントに久しぶりだな。元気にしてたか？」

「まあまあですわ。やっと、廃れてた寺の信頼を取り戻してきたんやから」

「坊のおかげですわ。」

「へえ、仕事してんだな、お前」

「大きなお世話や！俺はおとんがやり遂げられなかったことをやっ
とるだけや」

「しかし、志摩も子猫丸も変わんねーな！勝呂が変わったら余計
変わらなく見えるな……」

「確かに…僕は変わってへんかもな。けど、志摩くんは四男の金造はんそっくり思いません？」

「あ！似てる！似てるわ！髪伸びて余計に」

「やめてー！やめてー！よりによって金兄はやめてー！」

「志摩くん、被魔師一番隊隊長任命されはったんやから…柔造はんみたく髪黒染めて、切ればええのに。柔造はんみたくモテますよ？」

「それだけは堪忍」

「皆さん、お揃いですか？」

「おせーよ。メフィスト」

「だから奥村くん…仮にも理事長に向かってね…」

「京都からわざわざ勝呂達まで呼びやがって、どんだけ厄介な依頼なんだ？」

「……………分かりました。では、話しましょうか」

鍵

「事の発端は、一週間前、私は“中級以上”の屍グールの抹殺をお願いしました。」

「「「「「?!」」」」」

「理事長…あなたの結界がある限り、学園に中級以上レベルの悪魔の侵入を許すはずがない」

「はい。その通りです。雪男くん……しかし、いたのです。中級以上のグールが」

「それで、そのグールを殺れってか？」

「いえ。グールはネイガウス先生が処理しました」

「……………問題はその後ってわけか」

「その後、ネイガウス先生からこの“鍵”を受け取りました」

「鍵？」

「倒したグールの腹の中から出てきたらしいです」

「…俺達（上級被魔師）でも見たことねー鍵だな」

「その通り。どこに繋がる鍵か分からない」

「?!理事長…あなたにもですか?」

「わたしは学園だけにのみならず、あらゆる所に繋がる様々な鍵を扱っていますが、見たことはありませんね」

「俺達に、この鍵を調べろ……ちゅうことですか?」

「中級以上のグールの侵入も気になります。そこと並行して調査して下さい」

「中級以上のグールの召喚なんて、並の被魔師では出来ません…坊」

「ああ…だから俺達も呼ばれたんか」

「とつとと解決したいんでね。長くパーティーを組んできたあなた

方でしたら、早急に片付けてくれそうでしたので」

「俺はええで」

「俺は坊を援護するだけですわ」

「僕もです」

「勝呂が乗るなら、俺もやるぜ」

「兄さんが何かやらかさないように、僕も承ります」

「おい」

「鍵は渡しておきます。解決して下さるなら、鍵はどうしてくれても構いません」

「分かった。」

「では、お願いしますよ……」

行動

「とは言ったものの、どこからどう調べたらいいものか……」

「だな。いつそ鍵使ってドアあけてみつか？」

「そんな危険な橋渡れるかい!!」

「坊、まずは、その出てきたグールから情報もろった方がええんとちやいまつか？」

「志摩……ああ。そやな。奥村、俺らはグールの線から調べる。」

「分かった。兄さん、僕達はネイガウス先生に少し話を聞いてこよう」

「そうだな!」

「奥村、鍵はお前が持つとけ」

「え?!俺なの?」

「奥村くん、一応この中じゃ一番上の称号持つてはるし……」

「悪魔に一番耐性あるから、いざとなっても大丈夫やろ」

「う・」

「兄さん、落とさないでよ」

「わ、わかってら!」

「ほな、俺らは行くで。なんか分かったら連絡するわ」

「
分
か
っ
た
」

調査？

「ここやな……例のグールが最後に滅却されたんは」

謎の鍵と、中級以上の悪魔の出現の真相を調べることになり、勝呂竜士・志摩廉造・三輪子猫丸の3人はグールの線から調べることにした。やってきたのは学園の裏にある森林への入口の側。グールが倒された場所だ

「……………坊。」

「……………ああ…かすかやけど、ぐつつつ臭いで」

「グールの大きさが分かりますな〜」

「これだけハッキリ臭い分かるなら、もしかしたら“あの時”が見えるかもしれへんな……子猫丸。」

「……やってみます」

子猫丸はグールが倒された箇所であろう、どす黒い血痕の後の中心に立ち詠唱を始めた。

宴の後よ……世に還らん……土にかえり血肉骨とかす……汝の宴に我をよべ……

「「?!」」

「坊！来ます！」

子猫丸達の目の前には倒されたグールと数々の被魔師の姿があり、激しい戦闘がくり広げられていた。先頭をきっていたのは上一級被魔師イゴール・ネイガウス。中級以上のグールにネイガウスも最上級の屍番犬ナベリウスで受けて立っていた。

「?……坊！あれ見て下さい！」

「グールの奴、なんか……持つてはるで！」

「?!…………鍵か!! 最初から奴の腹に入っとったわけやなかったんか…………」

「と。いうことは」

「誰かがグール召喚して鍵盗みに行かせたんや」

そのとき、ネイガウスの屍番犬ナベリウスの一撃がグールを直撃する。するとグールはけたたましいうめき声と共に血と肉体を拡散し消滅していった。決着がついたようだ…………消滅した後には、鍵が1つ落ち、ネイガウスが手に取る。

「坊」

「なんや廉造」

「あそこ、下」

「?!」

「坊!ぐ、グールの手が……う、動いてはる……」

「キモいな」

「あれ……手に鍵握ってんのとちゃうか？」

「……どういうことや？逃げたグールの片手に持ってたんは確かに鍵やった。じゃ、ネイガウス先生が拾ったあの鍵はなんや？」

「ね……ネイガウス先生が偽造したっちゅうわけは」

「ないやろ。いま俺らは一部始終見てて、そんな素振りなかったし……ネイガウス先生自身、グール完全に消した思てはるから、千切れた片手の逃走にはおそらく気付いてへん。」

「考えられるとすれば……………元々“鍵は2つ対”になってたつちゆうことか…」

「まあそう考えてまず間違いないやろ。子猫丸の詠唱六十六章“去視”は正確無比。コレだけの痕跡からの過去の透視は確実や」

「戦ってたネイガウス先生は、グールが鍵持ってたことに気付いてへんみたいやつたしな。」

「次、どないします？坊。」

「ネイガウス先生のところは奥村達がいる。まあ後で互いに情報交換といくか……………次はあの鍵について調べてみよか」

「けど鍵持つてはるの奥村君ですよ？坊」

「知つとるわ！ “ 2つ対の鍵 ” つつつのを徹底的に調べるで！」

「坊………この学園を往き来するのに一体どれだけの鍵あると思てはるの？」

「文句言つなや！志摩。行くで」

調査？

「ネイガウス先生」

「……奥村兄弟か……」

「イーゴル・ネイガウス隣達が被魔塾生時代の元講師の上一級被魔師だ。」

「話には聞いている。一週間前のことについて聞きに来たのだろう？」

「はい。情報が少なすぎますので」

「とはいえ、奴を倒した私自身…あの戦いには腑に落ちぬ点がいくつかあった」

「「?」?」

「1つは、やはり中級以上のグールの出沒だが…もう1つ。奴から一切“攻撃を受けなかった”ことだ」

「攻撃を受けなかった?」

「正確には攻撃をされなかったの方がいいか。中級以上のグールと分かった時点で、最上級の屍番犬^{ナベリウス}を召喚して戦ってしまった……しかし、翌々考えてみたら、奴からの攻撃自体は一切なかった」

「奴を倒した時出てきた鍵はこれでいいんだよね？」

「…ああ。それだ。…その鍵についても気になるな…」

「先生から、こういった鍵について……なにか聞いたことありますか？」

「多くの鍵を扱う被魔師だが……鍵の中には、いつ頃作られたのか・鍵を作った者が誰なのか 不明な鍵の方が多いときく。」

「え。鍵って誰が作ったのかわからねーのが普通じゃねーの？」

「学園で使用する鍵のほとんどは理事長のメフィスト・フェレス卿が作ったと聞いたことがある」

『あいつ鍵まで作れんのかよ?!』

「だが…鍵には古いねんきの入ったものもある。そういった鍵ほど…謎も多い…」

「……………ですね。理事長自身も、この鍵は見たことがない…と言っていました。」

「……………。今回の件で、少し鍵について興味が湧いた……。私も少し調べてみよう。グールが持っていた節も気になる」

「ええ…………それは構いませんが…………」

「程々にした方が身のためだぜ。先生…………俺達はパーティーまで組まされて調べてんだ。…………あんま深いところまで首突っ込むと…………死ぬぜ。」

「…………お前などに言われずとも。――奥村燐」

「…………ふん。今のは親切だぜ?…………行くぞ雪男。」

「……ああ。では先生、ありがとうございました」

「奥村」

「……………」。

「キャンサー名誉騎士取得……おめでとう」

「……………どうも……」

……………

「なんか結局…手掛かりもらったようでもらってねーよなあ」

「うん……確かにね。ネイガウス先生の話を整理するなら…出沒したグール自体はただの囷だった可能性がある。」

「何？」

「きっと召喚した犯人は…もっと別の大きな何かを狙っていたということさ」

「それが……この鍵？」

「可能性はある。でも、ここは正十字学園……被魔師が溢れかえるここで、いくら中級以上のグールを召喚したところで、やられる事は十分考えられたはずだ」

「グールなんかに大事な鍵は持たさねーってことか……鍵間違え

「たんなかな?!」

「んな訳ないだろ……きっと…その鍵、まだ何かあるんだ。」

「誰が作ったもんかわかんねーらしいしな…。」

「……………?!……………兄さん。少し、別行動とつてもいいかな……………」

「あ?1人でか?構わねーけど……………どこ行く気だよ」

「少し、ね。」

「……………。俺は、メフィストのところ行くぜ。あいつ鍵作れんなら、鍵について詳しいはずだからな」

「わかった。勝呂くんたちとも合わなきゃなんないから……………たぶん、会うのは夜だ。」

「了解」

扉と鍵

「なあゝ…ぼん。一体いつまで調べたらええんですか？」

「廉造。ちんたら言うな！対になつとる鍵について、徹底的に炙り出さんかい」

「坊。そういうても…対になつとる鍵だけで、200くらいありますよ……」

「200調べたらええ。」

「日い暮れますよ」

「ったく。“忍耐” ちゆう言葉ないんか？！」

「坊。志摩さんに一番ない言葉です」

「……………子猫さん??」

「だって、この学園の図書室……………なんか空気悪いねんもん。肩も凝ったわ」

「確かに……………地下で風通らへんからな」

.....

「やあ！奥村くん。私に話ですか」

「ああ。鍵についてだ」

「ん〜……と言われましてもね〜私もあの鍵を見たのは初めてです
から」

「あの鍵についてはいいんだ。それ“以外”の鍵について知りたい」

「……………」と、いいますと？」

「ネイガウスにきいた。この学園あらゆる場所に通じる鍵のほとんどは、あんたは作ってるってな」

「ええ。全てではありませんがね……少なくとも、あなた方被魔師に与えている鍵は、正真正銘……私が作ったものです。」

「なら、“あんたが持つ鍵”はどうだ？……あんたが作ったものか？」

「……………」。

「……………」。

「……ふう。そうですね……私が作ったものもあれば、
“そうでない”ものも……」

「じゃ質問を変える。“そうでない鍵”は……どうやって手に入れた
？」

「……奥村くん……随分と頼もしくなったものですね……」

「……おい。」

「はいはいちゃんと答えますよ。……答えは……」

“生まれるのです”

「?!……な」

「生まれるですよ。鍵は……」

「うま……れるって……」

「ある場所から……ある場所へ通ずる時、新たな鍵が生まれるので
す」

「……………」。

「例えば、私が初めてあなたにあげた鍵を覚えていますか？」

「……被魔塾へ行くための鍵だったな」

「その通り あれとて最初から形があつた訳ではありません。……私が塾を作り、扉を作つたことで塾へ通ずる鍵は完成する……あとは…完成した鍵の型をいくつか複製すればいいだけのなしです。」

「……なるほどな。この学園建てたのはあんた自身……その扉分の鍵を完成させるのも、腐るだけ所持するのも当然って訳か……。」

「あくまで、いくつが扉を作り鍵を持つてる私の持論ですがね」

「なんでもいい。……じゃ…謎の鍵つてのは…そもそも何なんだ？」

「なんてことない。“向こう側”の奴が作っちゃった………それだけの話です」

「?!……………学園に…通じる扉を…勝手に作っ たってことか!」

「少ないことはないですよ。……………なんせ、この学園には“サタンの息子” までいますからね…」

「……………。」

「しかし、私の結界があるために…扉と鍵は作れても、学園には足一歩踏み入れられませんかね」私は“作った向こう側”の通ずる扉の感知し、鍵を頂く……………」

「……敵陣に乗り込んでまでか？」

「……そうでもしなければ、ゲームの主導権というものは手に入れませんからね。」

「……だんだん胡散臭い話になってきやがったよ……」

「これがまた楽しい」

「知るか！……まあ鍵について大体のことはわかった。…どうもな」

「――燐くん……」

「……………」

「“向こう側で生まれた鍵”である限り、扉を開けてみないことは分かりはしませんよ」

「……………そうだな」

「気をつけて下さい。……………なんせ、
“何処へ通ずる” 分からない」

「……………」

「帰って来れなくなる可能性”

も…頭に入れておくといい。」

「……………」。

ガチャン

「パンドラの箱ってわけか……。」

整理と結論

燐はメフィスト・フェレスから鍵について質問し終え、校内から出ようという所だった。窓の外はほんのり夕日が見える……

『そろそろあの3人と鉢合つとくか……』

燐がそう思ったのと同じくして、女子生徒何人かが燐を呼び止めた。

「燐先生！」

「?!」

「今大丈夫ですか？」

「おう、少しだけな。どうした？」

「奥村雪男先生の悪魔薬学のテスト範囲を教えてくださいたくて先生探しているんですけど……見当たらず……麟先生、ご存知ないですか？」

「雪男？……わりいな……今は任務で出てるんだ。また何日かしたら、探してきいてみってくれるか？」

「そうですか……分かりました！麟先生、ありがとうございました」

「テスト、頑張つてな！」

「は、はい！／／／」

『そついや……雪男の奴どこ行った？』

.....

燐は、学園の少し離れにある、自分と弟・雪男と暮らす寮についた。燐が被魔塾生になった頃から弟と共に暮らしている寮で、今ではすっかりもう一つの家だ。昔は同室だったが、大人になった今部屋はもちろん別だ。本当は、寮自体も出ようと思った所だったが、住み心地に慣れてしまい…出費かけてまで寮を出る理由もなかったため辞めることにした。

燐は寮のてっぺん、屋根まで登る……被魔師スーツの内ポケットから一本の笛を出す。夕日の落ち掛ける空をさし、笛の音を響き渡らせた。

燐!!

「クロ！」

クロは猫又猫に憑依する悪魔だ。元々は燐の養父・藤本獅郎神父の使い魔だったが…獅郎の死後、気持ちの行き場のないクロを引き取ったのが燐だ。

10年経ても…2人の友好は薄れることはなく、むしろ昔にも増して絆は深まっている。出会った当初こそ“飼猫”だったが…今や立派な燐の“使い魔”だ

呼んだな?! 燐!

「ああ、雪男を探してくれ。あいつ連絡1つ寄越さねえ上に、つながらねーからどこにいるか分からん。急ぎだ。片っ端から探してくれ、クロ。」

わかった。見つけたらどうする？

「雪男を連れて、ここまで頼む。」

任せておけ！燐！

「さて、と。勝呂たちと合流すつか…」

「あれ？雪男くん…おらへんやないですか」

「あいつ、用あるって1人でどっか行っちまいがった……今、ク口に探さしてる」

「ほな、先に…情報交換しちやいましょうか？坊…」

「…せやな。奥村、先俺らから言っわ。俺らはグールの倒れた場所で“去視”をやってみたんや」

「?!……その場で起きたことを、その痕跡から呼び覚ますつつやつか。」

「せや。子猫丸がその手の名手でな……その中級以上のグールつつもんを見てみた。」

「…………で？」

「面白いものが見えたでえ」

「面白いもの？」

「志摩くん、話割り込んだらあかんで」

「ズバリ！鍵は2つあったんや」

「……は？」

ゴッソ

「いったあああ！坊！な、なんで殴りますの？！」

「話略し過ぎや！廉造黙つとけ！」

「……言わんこっちゃない……」

「まあ、もつと詳しく言うと……ネイガウス先生とグールの戦いの末出てきた……その、お前が持つとる鍵とは別に、もう1つ……鍵を見たんや」

「なに?! その鍵は……」

「残念ながら……倒したはずのグールの片腕が、鍵握って消えてしま
いよった……」

「……片腕だけで、か?」

「せや。」

「キモイ……」

「ともかく……お前の持つとるその鍵、本当は2つ対になつとるっちゅうことや」

「ネイガウス先生達は……まさかグールの片腕だけが、ひとりでに動いてどこか消えるとは考えなかったようですわ。」

「子猫さんの去視やって、第三者から見て気づけたことなのかし

れへんけど……」

「ま、実際そうだろうな……。俺達がネイガウスに話聞いた限りじゃ、あの人自身、グールとの戦闘にはいくつか腑に落ちなかったとしか言ってるねーし」

「腑に落ちなかったって……何がですか？」

「まず1つは…グールの出現と、もう1つが…グールからの攻撃が一切なかったことらしい。」

「ほんまか？」

「ああ。だからネイガウスの攻撃で一発だったらしいぜ」

「ただ鍵求めって…訳やなさそうですね…」

「どういうことや？子猫さん」

「だって、鍵盗むだけやったら目立つグール召喚せんと…その犯人自身がやった方が絶対楽やし、効率的です」

「雪男と同じこと言ってるぜ、子猫丸。雪男も…鍵を盗むとは別に、何か別の目的があるんじゃないのかって踏んでる」

「となると…やっぱりこの鍵しかあらへんな…」

「対になつてゐるもう一つの鍵は、相手に渡つちまつてゐるからしょうがねーとして……残ったこいつ（鍵）でどこまで出来るかな」

「……どこか…扉開けてみます？坊…」

「……………」。

「志摩の言つとおりだぜ、勝呂。メフィストに、鍵について聞いてみたが…あいつも、結局は扉開けてみる方法しかないだろうとさ」

「
.....
開けてみるか.....
」

もう一つ

結局、扉を開けて見るのは翌朝に持ち越すこととなった……日も暮れ、悪魔達の動きが活発化する中で、扉を開けるは危険だと判断したからであつた。

それよりも、燐はいまだ帰って来ないクロを待っていた。雪男を探しに行かせたつきり、やはりまだ帰らない。勿論、雪男も。雪男のことだから、いざ何かあっても問題ないとは思いつつも、やはり心配だ……

りん！

「?!」

燐がそう考えてた矢先、微かながら、遠くから声が聞こえた。

燐！

「クロ!!」

ハッキリ見えてきた影は、雪男の探しに行かせた使い魔クロだった。

隣！ただいま！

「遅いぞクロ……………雪男！」

「兄さん、ごめん。遅くなった」

「全くだ。一体どこ行ってたんだ？」

「僕達の“家”に帰ってた」

「?!……修道院か」

「ああ……。」

「……急にまた……なんで？」

「書庫で、鍵についてなんかいい書物はないか見てたんだ」

「書庫……なんてあったのか……」

「修道院の裏にね……父さんは聖騎士だったし、なんか力になりそうな物があるかもって。」

「なるほどな……んで？ 実際どうだったよ。」

「……あつたよ、1つ、気になる文面がね。」

決断へ

「気になる文面？」

「先に言っと、“闇へと繋がる鍵”があるらしい……」

「？」

雪男と燐はひとまず寮の中に入り、修道院にある聖騎士、藤本獅郎の書庫で雪男が調べてきた成果を聞くことになった。

「なんだそりゃ。」

「上級被魔師のみに扱えられる鍵の書物に書いてあったんだ。鍵は、扉により時点と目的地が繋がれて初めて誕生する」

「それはメフィストも言ってたな。あいつがこの聖十字学園や被魔塾とか作る際に、扉を造ったことによって同時に鍵も生まれてきたって。」

「そう……しかし、稀に、“失敗作”があるらしい……」

「っ？！失敗作……」

「そう。つまり、うまく扉が繋がらなかった場合さ。」

「なるほどな…失敗すると…鍵はどうなるんだ？」

「普通なら出来ない。何故なら鍵は、扉と扉が繋がれて初めて誕生するからだ。けど、例外が1つだけある」

「……例外……。」

“虚無界”で鍵を造ったときだ

「?…どういっ」

「その書物によると、『古くから、虚無界ゲヘナで鍵を造ることはあまり考えられない。』とある。何故なら、虚無界の住人達は、物質界の僕達とは違って、生物・無生物問わず様々な物質に憑依して僕達の生活に干渉出来るからだ。」

「扉や鍵なんてわざわざ作る必要はないわけだ」

「そう。けど僕達は違う。扉や鍵を使わなければ、あちら側の世界に干渉出来ない……だから僕達被魔師は、鍵を大切にする。」

「虚無界の奴らが、物質界に繋がる扉と鍵作ったら失敗すんのか？」

「そうじゃない。扉と鍵を造って、仮に失敗してしまっても……鍵は生まれてしまうんだ」

「なんだと?! んじゃ…失敗だしたら…扉は、鍵は、“どこに繋がんだよ!”」

「そこだ。」

「?!」

「僕は、今回の事件。そのことが大きく関わっていると思うてる」

「虚無界で造られた失敗作の…扉と鍵が、どこへ繋がるかが?」

「ああ……兄さんの持つてるその鍵は恐らく、虚無界で造られ失敗作。犯人は、どこへ繋がるか分からない扉を開けて、“何か”をしようとしている。」

「……けど…勝呂達は、鍵は2つ対になってるって言ってたんだぜ？」

「2つ？」

「子猫丸の去視で見たんだと。倒したはずのグールの腕が、もう一つ鍵を持って消えていくのを…」

「…鍵は…2つ…」

「実は…明日…勝呂達と、この鍵使って、扉開けてみつか。って話してた」

「?!き、危険だ!兄さん!」

「勿論、色々下準備はする。けど、メフィストも言ってたが…鍵である以上、対象物を開けてみなきゃただの鍵でしかないだろ……それ以上もそれ以下もない。鍵は開けるものだ。パンドラの箱だろうが、何だろうが、開けてみなきゃ…この事件は、前には進めねーと俺は思ってる」

「……相手の思いつボの可能性だって…あるだろ。」

「……………尻尾出してくれりゃ儲けもんだろ?」

「……………」。

「……………」
クス……………それもそうだね……………開けよう。扉を」

開け

翌朝……人通りの少ない1つのドアに、燐、雪男、竜士、廉造、子猫丸は集った。いよいよ、扉を開けるときが来たのだ

「いよいよ……だな。」

「とりあえず、最低の場合の想定して防御と攻撃の下準備はしてある……奥村、お前が鍵開け」

「お、おう」

「兄さん、降魔剣は一応退いとして」

「お、おう」

「奥村くん……ゆっくりですよ!」

「慎重にやで〜慎重に。」

「うるせーよ！外野！大体志摩に慎重にとか言われたくねーよ！」

「ひどっー！」

「……………いくぜ」

全員が頷くのを確認すると、
燐は鍵を取り出し鍵穴に差し込んだ。

「……………。」

ガチャ
ン

「開いた………」

「扉……開けるぞ」

「ああ。」

ギイ……

「「「「「.....」」」」」

「なっ！」

「なんも.....ないですね.....」

「.....鉄の壁しかないやん」

「奥村…開けんの失敗したんとちゃうか？」

「えっ?! 待て! 待て! 失敗とかあんの?!」

「どういうことだ? 兄さん、ちゃんとやった?」

「雪男までなんだよ！鍵だろ？！鍵だよ？！差して回せばいいんだよね？！」

「杞憂……だつたのとちやいます？」

「どういふことですか？志摩くん」

「だから、中級以上のグール出てきたんも偶然で、虚無界で創られた鍵うちゅうのも違こうて、ただの誰かの忘れ物ちやいます？」

「志摩くんらしい結論っちゃ結論ですわ……」

「そうしたら、グールが片腕だけでも持ち帰ったもう一つの鍵の存在が気になる。」

「それにや、仮にもし虚無界で創られた“失敗作”の鍵やったとしたら、ちよつとやそつとじゃ簡単に開くもんでもないかもしれへん」

「坊の言つとおりですわ。…なにか、条件があるのかもしれないね……」

「条件？」

「何らかの条件があつて、それが満たされて初めて鍵が使いものになるっちゅう感じの」

「うん……子猫丸くんの案は案外的を射ってるのかも」

「なら、その条件から考えねーとなんねーじゃん」

「また調べものからですか」

「…志摩くん…」

「…飽きたな こいつ」

「?!」

「兄さん、どうしたの？」

「…悪魔の気配だ」

「「「?!」」」

「「「?!どこから…」」」

開け（後書き）

投稿遅れましてお詫び申し上げます。すいませんでした（・・・）
投稿した気でいたら実はしてなかったというオチ……最悪ですわ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366y/>

闇の鍵

2011年12月19日13時51分発行